

業績および財務データ

当行の「会社法第444条第3項」に定める連結計算書類は、「会社法第444条第4項」により有限責任監査法人トーマツの監査を受けております。また、当行の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結附属明細表は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、有限責任監査法人トーマツの監査証明を受けております。以下の連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書及び連結キャッシュ・フロー計算書は、上記の連結財務諸表に基づいて作成しております。

連結財務諸表

●連結貸借対照表

(単位：百万円)

(単位：百万円)

	平成27年3月期 (平成27年3月31日現在)	平成28年3月期 (平成28年3月31日現在)		平成27年3月期 (平成27年3月31日現在)	平成28年3月期 (平成28年3月31日現在)
資産の部			負債の部		
現金預け金	585,218	592,840	預金	6,270,209	6,394,225
コールローン及び買入手形	34,716	34,166	譲渡性預金	913,911	796,506
買入金銭債権	11,799	11,927	コールマネー及び売渡手形	20,428	35,832
商品有価証券	154	504	債券貸借取引受入担保金	39,685	24,238
金銭の信託	1,500	2,878	借入金	54,808	39,052
有価証券	3,168,152	2,807,154	外国為替	147	215
貸出金	4,347,459	4,598,410	その他負債	84,064	61,541
外国為替	3,972	3,957	退職給付に係る負債	28,874	37,452
リース債権及びリース投資資産	9,454	10,043	睡眠預金払戻損失引当金	309	350
その他資産	19,808	17,948	偶発損失引当金	1,130	1,159
有形固定資産	83,652	81,926	繰延税金負債	130,903	95,505
建物	31,097	30,238	再評価に係る繰延税金負債	30	0
土地	43,927	43,771	支払承諾	14,985	15,284
建設仮勘定	314	886	負債の部合計	7,559,490	7,501,364
その他の有形固定資産	8,312	7,029	純資産の部		
無形固定資産	2,943	2,896	資本金	42,103	42,103
ソフトウェア	2,635	2,591	資本剰余金	30,301	30,301
その他の無形固定資産	307	305	利益剰余金	290,491	307,315
繰延税金資産	1,772	1,591	自己株式	△ 1,208	△ 1,121
支払承諾見返	14,985	15,284	株主資本合計	361,688	378,599
貸倒引当金	△ 30,288	△ 27,114	その他有価証券評価差額金	328,898	274,404
資産の部合計	8,255,301	8,154,418	繰延ヘッジ損益	△ 2,195	△ 2,684
			土地再評価差額金	63	1
			退職給付に係る調整累計額	△ 207	△ 5,556
			その他の包括利益累計額合計	326,558	266,164
			新株予約権	515	518
			非支配株主持分	7,047	7,770
			純資産の部合計	695,810	653,053
			負債及び純資産の部合計	8,255,301	8,154,418

●連結損益計算書

(単位：百万円)

	平成27年3月期 (平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)	平成28年3月期 (平成27年4月1日から平成28年3月31日まで)
経常収益	114,959	112,689
資金運用収益	77,871	76,183
貸出金利息	51,574	49,291
有価証券利息配当金	25,804	26,171
コールローン利息及び買入手形利息	285	208
預け金利息	3	4
その他の受入利息	202	506
役務取引等収益	19,058	19,092
その他業務収益	9,229	11,837
その他経常収益	8,800	5,576
貸倒引当金戻入益	1,865	1,146
償却債権取立益	2	1
その他の経常収益	6,931	4,428
経常費用	78,682	78,601
資金調達費用	5,521	5,698
預金利息	2,860	2,970
譲渡性預金利息	815	777
コールマネー利息及び売渡手形利息	73	132
債券貸借取引支払利息	50	56
借入金利息	692	647
社債利息	39	-
その他の支払利息	988	1,114
役務取引等費用	6,298	6,393
その他業務費用	4,770	4,266
営業経費	60,671	58,919
その他経常費用	1,420	3,323
その他の経常費用	1,420	3,323
経常利益	36,277	34,088
特別利益	10	148
固定資産処分益	10	148
特別損失	322	277
固定資産処分損	322	277
税金等調整前当期純利益	35,965	33,958
法人税、住民税及び事業税	9,396	9,793
法人税等調整額	4,511	2,041
法人税等合計	13,908	11,835
当期純利益	22,056	22,123
非支配株主に帰属する当期純利益	779	801
親会社株主に帰属する当期純利益	21,276	21,322

●連結包括利益計算書

(単位：百万円)

	平成27年3月期 (平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)	平成28年3月期 (平成27年4月1日から平成28年3月31日まで)
当期純利益	22,056	22,123
その他の包括利益	134,704	△ 60,406
その他有価証券評価差額金	136,269	△ 54,569
繰延ヘッジ損益	△ 248	△ 489
土地再評価差額金	3	0
退職給付に係る調整額	△ 1,319	△ 5,348
包括利益	156,760	△ 38,283
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	155,887	△ 39,009
非支配株主に係る包括利益	873	726

●連結株主資本等変動計算書

平成27年3月期（平成26年4月1日から平成27年3月31日まで）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	42,103	30,301	275,845	△ 1,204	347,046
会計方針の変更による累積的影響額			△ 2,108		△ 2,108
会計方針の変更を反映した当期首残高	42,103	30,301	273,736	△ 1,204	344,938
当期変動額					
剰余金の配当			△ 4,534		△ 4,534
親会社株主に帰属する当期純利益			21,276		21,276
自己株式の取得				△ 66	△ 66
自己株式の処分			△ 14	62	47
土地再評価差額金の取崩			27		27
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	16,754	△ 4	16,749
当期末残高	42,103	30,301	290,491	△ 1,208	361,688

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計			
当期首残高	192,722	△ 1,946	87	1,112	191,975	453	6,176	545,651
会計方針の変更による累積的影響額								△ 2,108
会計方針の変更を反映した当期首残高	192,722	△ 1,946	87	1,112	191,975	453	6,176	543,543
当期変動額								
剰余金の配当								△ 4,534
親会社株主に帰属する当期純利益								21,276
自己株式の取得								△ 66
自己株式の処分								47
土地再評価差額金の取崩								27
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	136,175	△ 248	△ 23	△ 1,319	134,583	62	870	135,517
当期変動額合計	136,175	△ 248	△ 23	△ 1,319	134,583	62	870	152,267
当期末残高	328,898	△ 2,195	63	△ 207	326,558	515	7,047	695,810

平成28年3月期（平成27年4月1日から平成28年3月31日まで）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	42,103	30,301	290,491	△ 1,208	361,688
当期変動額					
剰余金の配当			△ 4,535		△ 4,535
親会社株主に帰属する当期純利益			21,322		21,322
自己株式の取得				△ 43	△ 43
自己株式の処分			△ 24	130	105
土地再評価差額金の取崩			61		61
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	16,824	86	16,911
当期末残高	42,103	30,301	307,315	△ 1,121	378,599

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計			
当期首残高	328,898	△ 2,195	63	△ 207	326,558	515	7,047	695,810
当期変動額								
剰余金の配当								△ 4,535
親会社株主に帰属する当期純利益								21,322
自己株式の取得								△ 43
自己株式の処分								105
土地再評価差額金の取崩								61
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△ 54,494	△ 489	△ 61	△ 5,348	△ 60,393	2	722	△ 59,668
当期変動額合計	△ 54,494	△ 489	△ 61	△ 5,348	△ 60,393	2	722	△ 42,757
当期末残高	274,404	△ 2,684	1	△ 5,556	266,164	518	7,770	653,053

●連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	平成27年3月期 (平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)	平成28年3月期 (平成27年4月1日から平成28年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	35,965	33,958
減価償却費	5,634	5,093
貸倒引当金の増減 (△)	△ 8,657	△ 3,174
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	521	876
睡眠預金払戻損失引当金の増減額 (△は減少)	1	41
偶発損失引当金の増減額 (△は減少)	410	29
資金運用収益	△ 77,871	△ 76,183
資金調達費用	5,521	5,698
有価証券関係損益 (△)	△ 6,845	△ 5,955
金銭の信託の運用損益 (△は益)	△ 65	120
為替差損益 (△は益)	△ 14,266	4,888
固定資産処分損益 (△は益)	312	129
商品有価証券の純増 (△) 減	15	△ 350
貸出金の純増 (△) 減	△ 130,824	△ 250,950
預金の純増減 (△)	△ 17,515	124,016
譲渡性預金の純増減 (△)	233,599	△ 117,405
借入金 (劣後特約付借入金を除く) の純増減 (△)	△ 12,614	△ 15,756
預け金 (日銀預け金を除く) の純増 (△) 減	△ 719	59
コールローン等の純増 (△) 減	93,361	421
コールマネー等の純増減 (△)	△ 31,805	15,403
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)	△ 13,913	△ 15,447
外国為替 (資産) の純増 (△) 減	△ 275	14
外国為替 (負債) の純増減 (△)	△ 128	67
リース債権及びリース投資資産の純増 (△) 減	△ 498	△ 588
資金運用による収入	85,176	81,421
資金調達による支出	△ 5,867	△ 5,769
その他	3,524	△ 4,144
小計	142,172	△ 223,485
法人税等の支払額	△ 7,820	△ 10,406
営業活動によるキャッシュ・フロー	134,352	△ 233,892
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△ 1,299,780	△ 925,355
有価証券の売却による収入	1,134,919	657,026
有価証券の償還による収入	409,629	519,353
金銭の信託の増加による支出	-	△ 1,500
有形固定資産の取得による支出	△ 2,601	△ 3,058
有形固定資産の売却による収入	60	559
無形固定資産の取得による支出	△ 600	△ 893
無形固定資産の売却による収入	-	0
その他	△ 71	△ 8
投資活動によるキャッシュ・フロー	241,554	246,124
財務活動によるキャッシュ・フロー		
劣後特約付借入金の返済による支出	△ 3,000	-
劣後特約社債及び新株予約権付社債の償還による支出	△ 15,000	-
配当金の支払額	△ 4,534	△ 4,535
非支配株主への配当金の支払額	△ 2	△ 4
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 22,537	△ 4,539
現金及び現金同等物に係る換算差額	20	△ 9
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	353,389	7,682
現金及び現金同等物の期首残高	229,279	582,668
現金及び現金同等物の期末残高	582,668	590,351

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項（平成28年3月期）

- 連結の範囲に関する事項
 - 連結子会社 7社
烏丸商事株式会社 京銀ビジネスサービス株式会社
京都信用保証サービス株式会社 京銀リース・キャピタル株式会社
京都クレジットサービス株式会社 京銀カードサービス株式会社
株式会社京都総合経済研究所
 - 非連結子会社 2社
(会社名)
京都・同志社発ベンチャー育成投資事業有限責任組合
京銀輝く未来応援ファンド投資事業有限責任組合
非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。
- 持分法の適用に関する事項
 - 持分法適用の非連結子会社及び関連会社は該当ありません。
 - 持分法非適用の非連結子会社 2社
(会社名)
京都・同志社発ベンチャー育成投資事業有限責任組合
京銀輝く未来応援ファンド投資事業有限責任組合
 - 持分法非適用の関連会社 1社
(会社名)
きょうと農林漁業成長支援ファンド投資事業有限責任組合
持分法非適用の非連結子会社及び関連会社は、当期純損益（持分に見合う額）、利益剰余金（持分に見合う額）及びその他の包括利益累計額（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除外しております。
- 連結子会社の事業年度等に関する事項
連結子会社の決算日は次のとおりであります。 3月末日 7社
- 開示対象特別目的会社に関する事項 該当事項はありません。
- 会計方針に関する事項
 - 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は移動平均法により算定）により行っております。
 - 有価証券の評価基準及び評価方法
 - 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、その他の有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては、移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他の有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
 - 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
 - デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
 - 固定資産の減価償却の方法
 - 有形固定資産
当行の有形固定資産は、定率法（ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）については定額法）を採用しております。
また、主な耐用年数は次のとおりであります。
建物 8年～50年 その他 3年～20年
連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。
 - 無形固定資産
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。
 - 貸倒引当金の計上基準
当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者に係る債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下、「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。
破綻懸念先及び貸出条件緩和債権等を有する債務者で、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除した残額が一定額以上の債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを当初の約定利率で割り引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法（キャッシュ・フロー見積法）により計上しております。
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。
連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。
 - 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準
睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認められる額を計上しております。
 - 偶発損失引当金の計上基準
偶発損失引当金は、責任共有制度に基づく信用保証協会への負担金の支払い等に備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。
 - 退職給付に係る会計処理の方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期

間帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、数
理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

- 数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内
の一定の年数（10年）による定額法により按分した額
を、それぞれ発生の際連結会計年度から損益処理
なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職
給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法
を適用しております。
- 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
当行の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付してお
ります。
連結子会社については、当連結決算日現在、該当事項ありません。
 - 重要なヘッジ会計の方法
 - 金利リスク・ヘッジ
当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、
ヘッジ対象とヘッジ手段を紐付けする方法のほか、「銀行業における金融商
品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協
会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日）に規定する繰延ヘッジ
（キャッシュ・フローを固定するヘッジ）によっております。ヘッジ有効性
評価の方法については、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係
の検証により有効性の評価をしております。
 - 為替変動リスク・ヘッジ
当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計
の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査
上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年
7月29日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方
法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行
う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象
である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が
存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。
連結子会社については、当連結決算日現在、該当事項ありません。
 - 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の
「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。
 - 消費税等の会計処理
当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっ
ております。

会計方針の変更（平成28年3月期）

「企業結合に関する会計基準」（企業会計基準第21号 平成25年9月13
日。以下、「企業結合会計基準」という。）、「連結財務諸表に関する会計
基準」（企業会計基準第22号 平成25年9月13日。以下、「連結会計基
準」という。）及び「事業分離等に関する会計基準」（企業会計基準第7号
平成25年9月13日。以下、「事業分離等会計基準」という。）等を当連
結会計年度から適用し、支配が継続している場合の子会社に対する当行の持
分変動による差額を資本剰余金として計上するとともに、取得関連費用を発
生した連結会計年度の費用として計上する方法に変更しております。また、
当連結会計年度の期首以後実施される企業結合については、暫定的な会計処
理の確定による取得原価の配分額の見直しを企業結合日の属する連結会計年
度の連結財務諸表に反映させる方法に変更いたします。加えて、当期純利益
等の表示の変更及び少数株主持分から非支配株主持分への表示の変更を行っ
ております。当該表示の変更を反映させるため、前連結会計年度については、
連結財務諸表の組替えを行っております。
企業結合会計基準等の適用については、企業結合会計基準第58～2項（4）、
連結会計基準第44～5項（4）及び事業分離等会計基準第57～4項（4）
に定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首時点から将来
にわたって適用しております。
なお、当連結会計年度において、連結財務諸表及び1株当たり情報に与える
影響額はあります。

未適用の会計基準等（平成28年3月期）

- 「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号
平成28年3月28日）
- 概要
本適用指針は、主に日本公認会計士協会 監査委員会報告第66号「繰延税
金資産の回収可能性の判断に関する監査上の取扱い」において定められてい
る繰延税金資産の回収可能性に関する指針について基本的にその内容を引き
継いだ上で、一部見直しが行われたものです。
 - 適用予定日
当行は、当該適用指針を平成28年4月1日に開始する連結会計年度の期首
から適用する予定であります。
 - 当該会計基準等の適用による影響
当該適用指針の適用による影響は、評価中であります。

注記事項（平成28年3月期）

（連結貸借対照表関係）

- 非連結子会社及び関連会社の出資金の総額
出資金 651百万円
- 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。
破綻先債権額 4,820百万円
延滞債権額 82,698百万円
なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続してい
ることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みが全くないもの
として未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下、
「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令(昭和40年政令
97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定す
る事由が生じている貸出金であります。
また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務
者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以
外の貸出金であります。

3. 貸出金のうち3か月以上延滞債権額は該当ありません。
 なお、3か月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3か月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。
4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。
 貸出条件緩和債権額 590百万円
 なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3か月以上延滞債権に該当しないものであります。
5. 破綻先債権額、延滞債権額、3か月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。
 合計額 88,109百万円
 なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。
6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。
 27,180百万円
7. 担保に供している資産は次のとおりであります。
 担保に供している資産
 有価証券 39,069百万円
 担保資産に対応する債務
 債券貸借取引受入担保金 24,238百万円
 預金 14,315百万円
 借入金 6,384百万円
 上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。
 有価証券 368,741百万円
 また、その他資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。
 保証金 1,685百万円
8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。
 融資未実行残高 1,329,641百万円
 うち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なもの 1,280,639百万円
 なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができ旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。
9. 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。
 再評価を行った年月日 平成14年3月31日
 同法律第3条第3項に定める再評価の方法
 土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める地価税法に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額(路線価)に基づいて、実行価格修正、時点修正等の合理的な調整を行って算出。
 同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額 1,645百万円
10. 有形固定資産の減価償却累計額
 減価償却累計額 76,846百万円
11. 有形固定資産の圧縮記帳額
 圧縮記帳額 2,001百万円
 (当該連結会計年度の圧縮記帳額 一百万円)
12. 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。
 劣後特約付借入金 32,000百万円
13. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額 17,445百万円

(連結損益計算書関係)

1. その他の経常収益には、次のものを含んでおります。
 株式等売却益 2,012百万円
2. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。
 株式等売却損 1,924百万円
 株式等償却 154百万円
3. 営業経費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。
 給料・手当 24,351百万円

(連結包括利益計算書関係)

1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

その他有価証券評価差額金	
当期発生額	△83,341百万円
組替調整額	△5,954百万円
税効果調整前	△89,295百万円
税効果額	△34,726百万円
その他有価証券評価差額金	△54,569百万円
繰延ヘッジ損益	
当期発生額	△1,723百万円
組替調整額	1,094百万円
税効果調整前	△628百万円
税効果額	△139百万円
繰延ヘッジ損益	△489百万円
土地再評価差額金	
当期発生額	一百万円
組替調整額	一百万円
税効果調整前	一百万円
税効果額	△0百万円
土地再評価差額金	0百万円
退職給付に係る調整額	
当期発生額	△7,827百万円
組替調整額	126百万円
税効果調整前	△7,701百万円
税効果額	△2,353百万円
退職給付に係る調整額	△5,348百万円
その他の包括利益合計	△60,406百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	379,203	—	—	379,203	
自己株式					
普通株式	1,319	33	141	1,210	(注)

(注) 自己株式の増加は、単元未満株式の買取りによる取得であり、減少は新株予約権(ストック・オプション)の権利行使による譲渡であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の 内訳	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計 年度末残高 (百万円)	摘要
		当連結会計 年度期首	当連結会計年度 増加	当連結会計年度 減少		
当行	ストック・ オプション としての 新株予約権	—	—	—	518	

3. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成27年6月26日 定時株主総会	普通株式	2,267	6.00	平成27年3月31日	平成27年6月29日
平成27年11月12日 取締役会	普通株式	2,267	6.00	平成27年9月30日	平成27年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年6月29日 定時株主総会	普通株式	2,267	その他利益 剰余金	6.00	平成28年3月31日	平成28年6月30日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係
- | | |
|---------------|------------|
| 現金預け金勘定 | 592,840百万円 |
| 預け金(日銀預け金を除く) | △2,489百万円 |
| 現金及び現金同等物 | 590,351百万円 |

(リース取引関係)

借手側

1. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

1年内	259百万円
1年超	1,830百万円
合計	2,089百万円

貸手側

1. ファイナンス・リース取引

- (1) リース投資資産の内訳
- | | |
|----------|-----------|
| リース料債権部分 | 10,638百万円 |
| 見積残存価額部分 | 12百万円 |
| 受取利息相当額 | △1,078百万円 |
| 合計 | 9,572百万円 |
- (2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の連結決算日後の回収予定額 (単位:百万円)

	リース債権	リース投資資産に係る リース料債権部分
1年以内	189	3,174
1年超2年以内	147	2,754
2年超3年以内	89	2,192
3年超4年以内	36	1,405
4年超5年以内	8	724
5年超	9	387

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料	
1年以内	5百万円
1年超	4百万円
合計	9百万円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、預金業務、貸出業務、商品有価証券売買業務、有価証券投資業務、内国為替業務、外国為替業務等の銀行業務を中心に、信用保証業務、リース業務、クレジットカード業務などの金融サービスを提供しております。地域における中核的金融機関として安定した金融仲介機能を発揮することを基本的使命とし、中小企業や個人に対する預金や貸出金等の多様な金融サービスの提供、債券や株式等の有価証券への運用を行うとともに、資産・負債構成の適正化やリスクヘッジ等の対応を行うことで安定した収益を確保し、健全経営を堅持しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産のうち、貸出金については、主に地元企業や個人に対する事業資金や各種ローンであり、これらは与信先の経営状態の悪化等により元本や利息が回収できなくなる信用リスクを有しています。

また、有価証券は、主に債券や株式等であり、これらは、発行体の経営状態の悪化等により有価証券の価値が減少する信用リスクのほか、市場価格の変動により調達と運用の利鞘が縮小又は逆転する金利リスクや市場価格の変動により損失を被る価格変動リスクなどの市場リスクを有しています。

ほかに、預金等の相対的に期間の短い資金で調達を行う一方で、貸出金や有価証券等の相対的に期間の長い資金で運用を行っているため、資金の運用と調達の期間ミスマッチや長期しない資金の流出等により資金繰りに支障をきたし、通常よりも著しく高いコストの資金調達を余儀なくされ損失を被るリスク、並びに市場の混乱等により、市場において取引が出来なかつたり、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされることにより損失を被るリスクなど、流動性リスクを有しています。

デリバティブ取引は、金利スワップ取引、金利キャップ取引、通貨スワップ取引、通貨オプション取引、為替予約取引等です。金利先物取引、債券オプション取引等については、当連結会計年度末時点での残高はございません。なお、連結子会社は、デリバティブ取引を行っておりません。

デリバティブ取引は、市況変動から損失を被る可能性のある市場リスクや取引の相手方が契約不履行に陥った場合に損失を被る可能性のある与信リスクが内包されております。なお、取引の大半がヘッジ目的や顧客取引に対するカバー取引であるため、市場リスクにつきましてはデリバティブ取引の被るリスクと資産・負債が被るリスクが相殺されるようになっております。

当行は、金利や為替等の相場変動にさらされている資産にかかるリスク(市場リスク)を回避する目的として、デリバティブ取引を活用するとともに、短期的な売買を行うトレーディング取引については一定の取引限度額等を設定し、取組んでおります。

このほか、新しい金融商品に対するお客様のニーズに積極的にお応えするために、デリバティブ取引を利用しております。

なお、デリバティブ取引を利用したヘッジ会計の内容は以下のとおりであります。

- ① ヘッジ会計の方法は繰延ヘッジ処理によっております。
- ② ヘッジ方針(ヘッジ手段、ヘッジ対象を含む)

「金融商品会計に関する実務指針」等に準拠する内規に基づき、金利リスク及び債券・株式等の価格変動リスクを対象としております。

なお、当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ対象とヘッジ手段は以下のとおりであります。

- ・ヘッジ手段…金利スワップ、通貨スワップ
- ・ヘッジ対象…固定金利貸出資産の一部、定期預金の一部、有価証券の一部

- ③ 金利スワップ並びに、通貨スワップにつきましては、期末基準日において、ヘッジの有効性を確認しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当行では、「信用リスク管理規程」により、管理態勢を定めつつ、信用リスク管理の強化に取組んでいます。

リスク統轄部信用リスク管理室では、内部格付・自己査定制度、償却・引当など信用リスク管理の企画・統轄を行うとともに信用リスクの計量的な分析・把握を行っています。加えて、特定の取引先、特定の業種等に与信が集中していると、環境の変化等に伴い、大きな損失が発生する可能性があるため、さまざまな角度からポートフォリオの状況を分析し、過度な与信集中が起こらないよう管理しております。信用リスク量や与信集中状況については、毎月の信用リスク管理委員会に報告を行っております。

また、資産の健全性の維持・向上のために、グループ会社を含め、資産の自己査定を実施し適正な償却・引当を行っているほか、監査部に専門担当部署として資産監査室を設け、自己査定の実施状況及びこれに基づく償却・引当の妥当性を監査しております。

一方で、個別与信管理においては、営業部門から独立した審査部門として融資審査部を設け、厳格な審査を行っております。与信を行うにあたっては、融資審査部内の格付審査の担当が与信先の財務状態、技術力、将来性等に基づき、債務者格付の付与を厳格に行い、それを踏まえ、融資案件審査の担当が資金使途や返済原資と合わせ総合的に返済能力を判断しております。

また、行員の階層別の融資業務研修を実施するなど審査能力の向上にも注力しております。

併せて、融資審査部内に経営支援室を設置し、各種の経営改善支援策を通じて経営不振先の抜本的な事業再生を図り、当行資産の健全化に取組んでいるほか、自己査定結果に基づき、与信先に対して、個別に対応方針を策定するとともに、継続的なモニタリングを通じ、業況の変化に応じた対応を実施するなど、リスク管理の強化に努めています。

② 市場リスクの管理

当行では、「市場リスク管理規程」により管理態勢を定めつつ、市場リスク管理の強化に取組んでいます。所管部である証券国際部においては、有価証券等の市場リスクを適切に管理するため、自己資本・業務純益等の当行の体力や収益とのバランスを考慮したうえでポジション枠・損失限度額等のリスク許容度を設定しております。また、保有するポジション等のリスク管理においては適正かつ正確な時価の定期的な計測と把握に努め、VaR等によりリス

ク量を計量化し、当リスク量についてALM会議に報告を行っております。

なお、株式等にかかるリスクについては、自己資本及び株式等の評価益をもとにリスク許容量を設定し管理する方針としております。また、日々のポジション・損益を算出し経営陣に報告するとともに、株式等のリスク量を計測し経営陣に報告するなど十分なリスク管理を行っております。当行及びグループ会社が保有している株式等については、6か月ごとに実施する自己査定を通じて正確な実態把握に努めており、自己査定結果については、監査部に監査しております。

そのうえで、当行では、リスク統轄部内にALM室を設置し、預貸金を含めた市場リスクを信用リスクなど他のリスクと一元的に把握したうえで、これを体力(自己資本)の範囲内に適切にコントロールすることで安定した収益の確保に努めております。

このため、ALM室では、「VaR法」、「資産・負債現在価値の変動額(アウトライヤー基準に基づく金利リスク量)」などによりリスク管理・分析を行っています。また、バックテスティングやストレステスト等により、計量化手法や管理方法の妥当性・有効性を検証しております。

さらに、ALM会議では、半期ごとに金利・流動性等リスク管理方針の見直しを行っております。また、算出した各リスク量については、毎月のALM会議において報告するとともに、資産・負債構成の適正化やリスクヘッジ等の対応策を検討するなど、戦略的なリスクマネジメントに努めております。

デリバティブ取引については、取引の大半がヘッジ目的や顧客取引に対するカバー取引ですが、短期的な売買を行うトレーディング取引については、一定の損失限度額等を設定し、管理しております。

(市場リスクに係る定量的情報)

・トレーディング目的以外の金融商品

当行において、主要なリスク変数である金利リスク、価格変動リスク、為替リスクの影響を受ける主たる金融商品は、「貸出金」、「有価証券」、「預金」、「譲渡性預金」、「現金預け金」、「コールローン」、「コールマネー」、「デリバティブ取引」のうち金利スワップ取引、通貨スワップ取引であります。当行では、これらの金融資産及び金融負債についての市場リスク管理にあたり、VaRを算出して定量的分析に利用しております。金利リスク・為替リスク・政策投資株式以外の株式に係る価格変動リスクVaRの算出にあたっては、ヒストリカル・シミュレーション法(保有期間1か月、信頼区間99%、観測期間5年)、政策投資株式に係る価格変動リスクVaRの算出にあたっては、ヒストリカル・シミュレーション法(保有期間6か月、信頼区間99%、観測期間5年)を採用しております。

当連結会計年度末現在で当行の市場リスク量(損失額の推計値)は、全体で158億円であります。内訳は金利リスクVaR103億円、価格変動リスクVaR54億円(政策投資株式修正VaRゼロ、政策投資株式以外の株式VaR54億円)、為替リスクVaR1億円となっております。なお、当行では内部管理上、価格変動リスクVaRのうち政策投資株式VaRは、VaRから評価損益を差し引いた修正VaRを使用しており、上記価格変動リスクVaRでも修正VaRを使用しております(政策投資株式の評価損益3,373億円が、同価格変動リスクVaR1,486億円を上回っているため、政策投資株式の修正VaRはゼロとなっております)。

なお、当行ではモデルの正確性を確認するために、モデルが算出するVaRと実際の損益等を比較するバックテスティングを実施しております。ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

③ 流動性リスクの管理

当行では、資金の運用・調達残高の予想・検証を入念に行うことにより、資金ポジションの適切な管理を行うとともに、市場からの調達可能額を常時把握する体制をとり、流動性リスクに備えております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、連結貸借対照表計上額の重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。また、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません(注2)参照)。

(単位:百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	592,840	592,840	-
(2) 有価証券			
満期保有目的の債券	2,000	2,001	1
その他有価証券	2,800,134	2,800,134	-
(3) 貸出金	4,598,410		
貸倒引当金(*1)	△25,870		
	4,572,540	4,613,664	41,124
資産計	7,967,515	8,008,641	41,125
(1) 預金	6,394,225	6,395,600	1,375
(2) 譲渡性預金	796,506	796,519	12
負債計	7,190,731	7,192,119	1,387
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	1,249	1,249	-
ヘッジ会計が適用されているもの	△2,237	△2,237	-
デリバティブ取引計	△988	△988	-

(*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

(1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金についても、約定期間が短期間(1年以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私債は、内部格付、期間に基づく区分ごとに元利金の合計額を同様に新規に発行を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

(3) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(2) その他有価証券」には含まれておりません。(単位:百万円)

区分	平成28年3月31日
①非上場株式(*1)(*2)	3,381
②非上場その他の証券(*3)	1,638
合計	5,020

(*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしていません。

(*2) 当連結会計年度において、非上場株式について0百万円減損処理を行っております。

(*3) 非上場その他の証券のうち、ベンチャーファンド出資金など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額 (単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	515,837	-	-	-	-	-
有価証券	274,856	517,118	748,206	364,303	256,802	12,140
満期保有目的の債券	2,000	-	-	-	-	-
うち国債	2,000	-	-	-	-	-
地方債	-	-	-	-	-	-
短期社債	-	-	-	-	-	-
社債	-	-	-	-	-	-
その他有価証券のうち満期があるもの	272,856	517,118	748,206	364,303	256,802	12,140
うち国債	59,000	133,900	380,700	229,500	100,000	-
地方債	14,809	52,339	111,064	57,262	116,848	-
短期社債	-	-	-	-	-	-
社債	171,424	286,986	234,266	69,654	22,977	-
貸出金(*)	1,085,456	808,583	718,073	421,039	542,778	917,590
合計	1,876,150	1,325,701	1,466,280	785,343	799,581	929,730

(*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない87,519百万円、期間の定めのないもの17,368百万円は含めておりません。

(注4) 有利子負債の連結決算日後の返済予定額 (単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	5,961,381	397,404	35,438	-	-	-
譲渡性預金	796,506	-	-	-	-	-
合計	6,757,888	397,404	35,438	-	-	-

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

※1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」を含めて記載しております。

※2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1. 売買目的有価証券

連結会計年度の損益に含まれた評価差額 1百万円

2. 満期保有目的の債券

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債	2,000	2,001	1
	地方債	-	-	-
	短期社債	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	外国債券	-	-	-
	その他	-	-	-
小計	2,000	2,001	1	
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債	-	-	-
	地方債	-	-	-
	短期社債	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	外国債券	-	-	-
	その他	-	-	-
小計	-	-	-	
合計	2,000	2,001	1	

3. その他有価証券

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	489,788	149,107	340,680
	債券	2,055,456	2,007,932	47,523
	国債	941,278	911,878	29,400
	地方債	345,632	335,773	9,858
	短期社債	-	-	-
	社債	768,545	760,279	8,265
	その他	152,080	144,023	8,056
	外国債券	113,162	111,793	1,369
	その他	38,917	32,230	6,687
	小計	2,697,325	2,301,063	396,261
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	24,388	26,978	△2,590
	債券	44,910	44,977	△67
	国債	-	-	-
	地方債	18,541	18,553	△11
	短期社債	-	-	-
	社債	26,368	26,424	△56
	その他	33,510	34,272	△761
	外国債券	14,692	14,752	△59
	その他	18,817	19,519	△701
	小計	102,809	106,228	△3,418
合計	2,800,134	2,407,292	392,842	

4. 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当ありません。

5. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

(単位:百万円)

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	36,841	2,010	1,924
債券	477,785	3,022	23
国債	311,234	2,809	21
地方債	51,230	99	1
短期社債	-	-	-
社債	115,320	113	0
その他	139,788	3,371	348
外国債券	124,097	814	161
その他	15,690	2,556	186
合計	654,414	8,404	2,296

6. 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

7. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下、「減損処理」という。)しております。

当連結会計年度における減損処理額は、153百万円(すべて株式)であります。また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、資産の自己査定基準において、有価証券の発行会社の区分毎に以下のとおり定めております。

破綻先、実質破綻先、破綻懸念先	時価が取得原価に比べ下落
要注意先	時価が取得原価に比べ30%以上下落
正常先	時価が取得原価に比べ50%以上下落又は、時価が取得原価に比べ30%以上50%未満下落したもので市場価格が一定水準以下で推移している場合等

なお、破綻先とは、破産、特別清算、会社更生、民事再生、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している発行会社、実質破綻先とは、実質的に経営破綻に陥っている発行会社であります。破綻懸念先とは、今後、経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる発行会社、要注意先とは、今後の管理に注意を要する発行会社であります。正常先とは、上記破綻先、実質破綻先、破綻懸念先、及び要注意先以外の発行会社であります。

(金銭の信託関係)

1. 運用目的の金銭の信託 (単位:百万円)

運用目的の金銭の信託	連結貸借対照表計上額	連結会計年度の損益に含まれた評価差額
	2,878	-

2. 満期保有目的の金銭の信託

該当ありません。

3. その他の金銭の信託 (運用目的及び満期保有目的以外)

該当ありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。(単位:百万円)

	金額
評価差額	392,842
その他有価証券	392,842
その他の金銭の信託	-
(△) 繰延税金負債	△118,307
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	274,534
(△) 非支配株主持分相当額	△130
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	-
その他有価証券評価差額金	274,404

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当行は従業員の退職給付に充てるため、確定給付型の企業年金基金制度及び退職一時金制度を設けており、給与と勤務期間に基づいた年金及び一時金を支給しております。

また、連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表 (単位:百万円)

区分	金額
退職給付債務の期首残高	52,498
勤務費用	2,057
利息費用	524
数理計算上の差異の発生額	6,981
退職給付の支払額	△2,193
過去勤務費用の発生額	-
その他	0
退職給付債務の期末残高	59,868

(注) 企業年金基金に対する従業員拠出額を「勤務費用」から控除しております。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表 (単位:百万円)

区分	金額
年金資産の期首残高	23,623
期待運用収益	472
数理計算上の差異の発生額	△845
事業主からの拠出額	759
退職給付の支払額	△1,594
その他	0
年金資産の期末残高	22,415

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表 (単位:百万円)

区分	金額
積立型制度の退職給付債務	49,660
年金資産	△22,415
	27,244
非積立型制度の退職給付債務	10,208
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	37,452

区分	金額
退職給付に係る負債	37,452
退職給付に係る資産	-
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	37,452

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額 (単位:百万円)

区分	金額
勤務費用	2,057
利息費用	524
期待運用収益	△472
数理計算上の差異の費用処理額	126
過去勤務費用の費用処理額	-
その他	-
確定給付制度に係る退職給付費用	2,234

(注1) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。

(注2) 企業年金基金に対する従業員拠出額を「勤務費用」から控除しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。(単位:百万円)

区分	金額
過去勤務費用	-
数理計算上の差異	△7,701
その他	-
合計	△7,701

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。(単位:百万円)

区分	金額
未認識過去勤務費用	-
未認識数理計算上の差異	8,008
その他	-
合計	8,008

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	45%
株式	40%
現金及び預金等	6%
その他	9%
合計	100%

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

① 割引率	0.5%
② 長期期待運用収益率	2.0%
③ 予想昇給率	3.9%

3. 確定拠出制度

該当ありません。

(ストック・オプション等関係)

1. スtock・オプションにかかる費用計上額及び科目名

営業経費 108百万円

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	平成20年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役12名、当行の執行役員6名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 87,100株
付与日	平成20年7月29日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成20年7月30日から平成50年7月29日まで

	平成21年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役12名、当行の執行役員5名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 111,900株
付与日	平成21年7月29日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成21年7月30日から平成51年7月29日まで

	平成22年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役12名、当行の執行役員7名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 143,700株
付与日	平成22年7月29日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成22年7月30日から平成52年7月29日まで

	平成23年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役12名、当行の執行役員8名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 149,800株
付与日	平成23年8月1日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成23年8月2日から平成53年8月1日まで

	平成24年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役13名、当行の執行役員10名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 164,800株
付与日	平成24年7月30日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成24年7月31日から平成54年7月30日まで

平成25年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役13名、当行の執行役員8名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 144,400株
付与日	平成25年7月30日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成25年7月31日から平成55年7月30日まで

平成26年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役13名、当行の執行役員10名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 124,400株
付与日	平成26年7月30日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成26年7月31日から平成56年7月30日まで

平成27年ストック・オプション	
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役(社外取締役を除く)10名 当行の執行役員14名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 75,100株
付与日	平成27年7月30日
権利確定条件	権利確定条件は定めていない
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない
権利行使期間	平成27年7月31日から平成57年7月30日まで

(注) 株式数に換算して記載しております。

(2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(平成28年3月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

① ストック・オプションの数

	平成20年 ストック・ オプション	平成21年 ストック・ オプション	平成22年 ストック・ オプション	平成23年 ストック・ オプション	平成24年 ストック・ オプション	平成25年 ストック・ オプション	平成26年 ストック・ オプション	平成27年 ストック・ オプション
権利確定前							124,400株	-
前連結会計年度末	-	-	-	-	-	-	-	-
付与	-	-	-	-	-	-	-	75,100株
失効	-	-	-	-	-	-	-	2,600株
権利確定	-	-	-	-	-	-	-	121,800株
未確定残	-	-	-	-	-	-	-	75,100株
権利確定後								
前連結会計年度末	59,100株	77,400株	103,500株	108,600株	136,600株	127,200株	-	-
権利確定	-	-	-	-	-	-	-	121,800株
権利行使	10,200株	13,200株	19,700株	22,700株	24,200株	22,400株	29,400株	-
失効	-	-	-	-	-	-	-	-
未行使残	48,900株	64,200株	83,800株	85,900株	112,400株	104,800株	92,400株	-

② 単価情報

	平成20年 ストック・ オプション	平成21年 ストック・ オプション	平成22年 ストック・ オプション	平成23年 ストック・ オプション	平成24年 ストック・ オプション	平成25年 ストック・ オプション	平成26年 ストック・ オプション	平成27年 ストック・ オプション
権利行使価格	1株あたり 1円	1株あたり 1円	1株あたり 1円	1株あたり 1円	1株あたり 1円	1株あたり 1円	1株あたり 1円	1株あたり 1円
行使時平均株価	1株あたり 1,414円	1株あたり 1,414円	1株あたり 1,414円	1株あたり 1,414円	1株あたり 1,414円	1株あたり 1,414円	1株あたり 1,414円	-
付与日における 公正な評価単価	1株あたり 978円	1株あたり 805円	1株あたり 688円	1株あたり 678円	1株あたり 526円	1株あたり 762円	1株あたり 902円	1株あたり 1,439円

3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与された平成27年ストック・オプションについての公正な評価単価の見積方法は以下のとおりであります。

- 使用した評価技法 ブラック・ショールズ式
- 主な基礎数値及び見積方法

平成27年ストック・オプション	
株価変動性(注1)	32.5%
予想残存期間(注2)	2年3か月
予想配当(注3)	1株あたり 12円
無リスク利率(注4)	0.01%

- (注) 1.平成25年4月1日の週から平成27年7月20日の週末までの株価の実績に基づき、週次で算出しております。
 2.就任から退任までの平均的な期間、就任から発行日時時点までの期間などから割り出した発行日時時点での取締役の平均残存在任期間によって見積っております。
 3.平成27年3月期の配当実績
 4.予想残存期間に対応する国債の利回り

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	6,801百万円
退職給付に係る負債	11,477百万円
有価証券償却	3,039百万円
減価償却費	346百万円
その他	5,846百万円
繰延税金資産小計	27,511百万円
評価性引当額	△3,063百万円
繰延税金資産合計	24,448百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△118,307百万円
その他	△54百万円
繰延税金負債合計	△118,361百万円

納税主体ごとに相殺し、連結貸借対照表に計上した純額

繰延税金資産	1,591百万円
繰延税金負債	△95,505百万円

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率	33.0%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.6%
住民税均等割等	0.3%
評価性引当額の増減	△0.0%
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	3.3%
その他	△0.5%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	34.8%

3. 法人税等の税率の変更等による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成28年法律第15号)及び「地方税法等の一部を改正する等の法律」(平成28年法律第13号)が平成28年3月29日に国会で成立し、平成28年4月1日以後に開始する連結会計年度から法人税率等の引下げが行われることとなりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は従来の32.26%から、平成28年4月1日に開始する連結会計年度及び平成29年4月1日に開始する連結会計年度に解消が見込まれる一時差異については30.86%に、平成30年4月1日に開始する連結会計年度以降に解消が見込まれる一時差異については30.62%となります。この税率変更により、繰延税金資産は29百万円減少し、繰延税金負債は5,170百万円減少し、その他有価証券評価差額金は6,330百万円増加し、退職給付に係る調整累計額は131百万円減少し、法人税等調整額は995百万円増加しております。再評価に係る繰延税金負債及び土地再評価差額金、非支配株主持分に与える影響は軽微であります。

(関連当事者情報)

関連当事者との取引について記載すべき重要なものはありません。

(1株当たり情報)

1株当たり純資産額	1,705.75円
1株当たり当期純利益金額	56.41円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	56.31円

(注) 1.1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

1株当たり当期純利益金額

親会社株主に帰属する当期純利益	21,322百万円
普通株主に帰属しない金額	-百万円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	21,322百万円
普通株式の期中平均株式数	377,967千株

潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額

親会社株主に帰属する当期純利益調整額	-百万円
普通株式増加数	643千株
うち新株予約権	643千株

希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要

2.1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

純資産の部の合計額	653,053百万円
純資産の部の合計額から控除する金額	8,288百万円
うち新株予約権	518百万円
うち非支配株主持分	7,770百万円
普通株式に係る期末の純資産額	644,764百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数	377,992千株

3. 「会計方針の変更」に記載のとおり、企業結合会計基準等を適用し、企業結合会計基準第58-2項(4)、連結会計基準第44-5項(4)及び事業分離等会計基準第57-4項(4)に定める経過措置に従ってあります。
 なお、当連結会計年度において、1株当たり情報に与える影響はありません。

(重要な後発事象)

当社は、平成28年6月27日開催の取締役会において、関係当局の認可等を前提に、100%出資による証券子会社の設立を決議しました。

1. 設立の目的

多様化するお客様の資産運用ニーズに、ワンストップでお応えするため、総合的な金融サービスを提供することを目的として設立するものであります。

2. 新設する証券子会社の概要

会社名 京銀証券株式会社(注)
本店所在地 京都市下京区烏丸通松原上る薬師前町700番地
(京都銀行本店東館6階)

資本金 30億円

出資比率 当行100%

開業予定日 平成29年5月

(注) 金融商品取引法第31条の3の規定を踏まえ、当初、商号を「京銀証券準備株式会社」として子会社を設立し、第一種金融商品取引業の登録後、「京銀証券株式会社」に商号変更のうえ開業する予定としております。

当連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

	報告セグメント 銀行業	その他	合計	調整額	連結財務 諸表計上額
経常収益					
外部顧客に対する 経常収益	104,203	8,485	112,689	-	112,689
セグメント間の 内部経常収益	450	2,089	2,540	△2,540	-
計	104,654	10,575	115,230	△2,540	112,689
セグメント利益	31,442	2,664	34,107	△19	34,088
セグメント資産	8,143,667	43,904	8,187,571	△33,153	8,154,418
セグメント負債	7,500,642	25,531	7,526,174	△24,809	7,501,364
その他の項目					
減価償却費	5,013	79	5,093	-	5,093
資金運用収益	76,098	179	76,278	△95	76,183
資金調達費用	5,689	85	5,774	△75	5,698
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	3,928	23	3,951	-	3,951

- (注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の経常収益計上額との差異について記載しております。
2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、信用保証業、リース業、クレジットカード業等を含んでおります。
3. 調整額は、次のとおりであります。
- セグメント利益の調整額△19百万円は、セグメント間取引消去であります。
 - セグメント資産の調整額△33,153百万円は、セグメント間取引消去であります。
 - セグメント負債の調整額△24,809百万円は、セグメント間取引消去△30,365百万円及び退職給付に係る負債の調整額5,556百万円が含まれております。
 - 資金運用収益の調整額△95百万円は、セグメント間取引消去であります。
 - 資金調達費用の調整額△75百万円は、セグメント間取引消去であります。
4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

セグメント情報等

●セグメント情報

1. 報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当行グループは、銀行業を中心とした金融サービスに係る事業を行っております。なお、グループ各社が営む銀行業以外の事業については、重要性が乏しいことから、銀行業のみを報告セグメントとしております。

銀行業は、預金業務、貸出業務、商品有価証券売買業務、有価証券投資業務、内国為替業務、外国為替業務等を行っております。

2. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値であります。

3. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

	報告セグメント 銀行業	その他	合計	調整額	連結財務 諸表計上額
経常収益					
外部顧客に対する 経常収益	106,675	8,283	114,959	-	114,959
セグメント間の 内部経常収益	642	1,965	2,608	△2,608	-
計	107,317	10,249	117,567	△2,608	114,959
セグメント利益	33,533	2,746	36,279	△2	36,277
セグメント資産	8,242,851	41,628	8,284,479	△29,178	8,255,301
セグメント負債	7,560,908	24,764	7,585,673	△26,182	7,559,490
その他の項目					
減価償却費	5,547	86	5,634	-	5,634
資金運用収益	77,753	200	77,953	△82	77,871
資金調達費用	5,509	87	5,596	△74	5,521
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	3,157	44	3,201	-	3,201

(注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、経常収益と連結損益計算書の経常収益計上額との差異について記載しております。

2. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、信用保証業、リース業、クレジットカード業等を含んでおります。

3. 調整額は、次のとおりであります。

- セグメント利益の調整額△2百万円は、セグメント間取引消去であります。
 - セグメント資産の調整額△29,178百万円は、セグメント間取引消去であります。
 - セグメント負債の調整額△26,182百万円は、セグメント間取引消去△26,390百万円及び退職給付に係る負債の調整額207百万円が含まれております。
 - 資金運用収益の調整額△82百万円は、セグメント間取引消去であります。
 - 資金調達費用の調整額△74百万円は、セグメント間取引消去であります。
4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

●関連情報

前連結会計年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

1. サービスごとの情報

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	51,927	34,089	28,941	114,959

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1. サービスごとの情報

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	49,719	34,578	28,391	112,689

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

●報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報

該当事項はありません。

●報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報

該当事項はありません。

●報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報

該当事項はありません。